

《名画の扉》

大川美術館常設展から



「爽映」

1965年ごろ、紙本彩色
39・2号×56・0号

高山辰雄 (1912～2007年)

美術館の位置する水道山も緑が輝く季節となりました。鮮やかな色彩の本作は晴天の下、木々と水面が照り映えています。

高山辰雄は大分市に生まれ、幼い頃から水墨画に親しみ、上京すると日本画の色彩に驚いたといいます。東京美術学校では松岡映丘に師事。卒業後は日本画の研究グループに参加して研さんを積み、戦後は日展を中心に活躍しました。戦中から戦後に制作と生活ともに苦しい日々が続いた中、先輩の山本丘人から薦められてゴーギャン

ンの伝記を読み、その生きる姿勢に感銘を受けました。一つの転機になったといいます。その感動は当初生き方に対してだったものの、対象の形態を簡略化し鮮やかな色面により画面を構成するなどやがて作品にもその影響を感じさせるほどで、画材にもこだわった高山は岩絵の具を薄塗りすることで生まれる発色も重視しました。後年には「絵具の名前を忘れてしまった」「目はガラスのようになり透明でありたい」と印象的にも語っています。

(大倉)